

教育データを深読みする

◆EBPM

EBPM (Evidence Based Policy Making) エビデンスに基づく政策立案) は、特定のエピソードや担当者の経験ではなく、エビデンス(合理的根拠)に基づく政策立案。各省庁、自治体でEBPMを推進する取組が加速している。

教育分野においても、エビデンスに基づく政策、取組が重要視され始めている。個人の経験で語られがちだった教育を、統計学的根拠に基づき、経済学の手法で分析した教育経済学者・中室牧子氏が執筆した『学力』の『経済学』。8年前の発刊だが、常識と思われる知見や誰かの経験から判断されてきた教育の考え方や手法とは異なり、斬新で、説得力がある。

ここでは、教育分野でも確かなエビデンスをもとに施策を考えていくヒントになればと思います。いくつかの教育関連データを材料に、報道等では取りあげられない、見えていないデータや、その分析などに光を当てて見たい。

◆大学進学率・全国平均、56・6%

文部科学省が「学校基本調査」の集計結果を発表したのに合わせ、大学進学率が56・6%で過去最高だったとの報道が昨年末にあった。大学進学率の分子は大学進学者数、分母は「18歳人口相当数」である。「18歳人口相当数」は、3年前の中学校等卒業者をカウントしている。中学校と義務教育学校の卒業者数、中等教育学校前期課程の修了者数の合算数がそれに当たる。

さて、この56・6%から、2人に1人が大学に行く時代になった……というのは、全国平均の数字からの見解で、都道府県別に大学進学率を見ると、かなりばらつきが見られる(図1)。最も高い東京都は76・8%、平均より20ポイント高い。一方、もつとも進学率が低い秋田県は39・6%で平均より17ポイント低い。東京都と秋田県で40ポイント近い差があることになる。また、平均の56・6%より高いのは東京都ほか8県しかない。さらに、50%に満たない都道府県は23ある。全国平均値での報道がほとんどで、都道府県のば

らつきはあまりふれられていなかったように思うが、日本全体の大学進学の実態は見えてこない。このばらつきから見える高等教育を受ける機会の格差を考えていくならば、地域の特性や「家庭の社会経済的背景(S.E.S)」を含め、さらに詳細な分析も必要になってくるだろう。

◆全国学力・学習状況調査

4月に行われた「全国学力・学習状況調査」の報告が7月に公表された(本号・特集P10もご覧ください)。

学力調査の点数・正答率で、中学校3年生英語の4技能のうち、「話す」の正答率が12・4%、「書く」のそれが24・1%という数字が話題になったが、ここでは、学習状況調査を中心に見ていきたい。

学習状況調査では、新たな教育振興基本計画のコンセプトの一つとして登場した「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」(もう一つのコンセプトは、「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」)に関連する質問項目がいくつか新設された。

・友達関係に満足していませんか
・普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか

この二つの質問については、小学校で「当てはまる・よくある」「どちらかといえば、当てはまる」ときどきある」合わせて90・3%、

図1 各都道府県の大学進学率

都道府県 (高校所在地)	大学進学率	都道府県 (高校所在地)	大学進学率
東京	76.8%	沖縄	50.0%
京都	70.9%	栃木	49.9%
山梨	67.8%	岐阜	49.8%
奈良	62.3%	宮城	49.3%
大阪	61.4%	北海道	48.9%
兵庫	59.4%	高知	48.8%
神奈川	58.8%	長野	48.5%
千葉	57.6%	富山	48.0%
広島	57.3%	三重	46.7%
茨城	56.6%	新潟	46.2%
全国平均	56.6%	島根	46.2%
埼玉	55.8%	青森	45.0%
石川	55.7%	長崎	43.5%
愛知	55.7%	熊本	43.3%
香川	54.6%	鳥取	43.2%
岡山	53.5%	山形	42.7%
福井	53.3%	鹿児島	42.2%
滋賀	51.5%	佐賀	42.1%
徳島	51.3%	福島	41.7%
和歌山	51.0%	大分	40.7%
愛媛	51.0%	宮崎	40.5%
群馬	50.3%	山口	40.3%
福岡	50.3%	岩手	39.7%
静岡	50.2%	秋田	39.6%

令和5年度学校基本調査より作成

中学校では88・7%と、ともにおおむね90%が肯定的な回答だった。また、同じく新設の・地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか

は、小学校76・9%、中学校63・9%であった。地域コミュニティの基盤形成、社会教育人材の育成にかかわる数字で、来年度以降、この数字がどのように変わっていくか注目していきたい。

また、従来からあって、ウェルビーイングとかかわる次の二つの設問にも目を向けると、

・先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか

の回答は、小学校89・8%、中学校87・2%・学校に行くのは楽しいと思いますか

は、小学校85・4%、中学校81・8%が肯定的な回答となった。

この数字だけを見れば、別の調査(令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査)で明らかになった24万人を超える不登校者(小学校8万1498人、中学校16万3442人)の数やいじめ

の認知件数60万件(小学校50万562件、中学校9万7937件)などの数字は、別の国の話のように感じてしまう。

全国学力調査は調査対象が100万人を超える大規模調査ではあるが、調査を受けていない児童・生徒も実はかなりの数に上る。小学校で約6%、中学校で約14%が参加していない(図2・P40)。このデータとして脱落した部分に、先の友達関係や幸せな気持ちに満足していないと感じている層がいたかもしれない。全体の数字として捉えるには十分ではない。

図2 調査を受けていない数・率

小学校		調査対象数	集計対象数	未実施者数	未実施率	公立+国立計
	公立	1,019,859	964,350	55,509	5.4%	
	国立	6,396	6,191	205	3.2%	
	私立	13,190	6,804	6,386	48.4%	
合計	1,039,445	977,345	62,100	6.0%	5.4%	

中学校		調査対象	集計対象	未実施者数	未実施率	公立+国立計
	公立	983,778	893,528	90,250	9.2%	
	国立	9,968	9,262	706	7.1%	
	私立	81,836	21,191	60,645	74.1%	
合計	1,075,582	923,981	151,601	14.1%	9.2%	

令和5年度 全国学力・学習状況調査 報告書・調査結果より作成

ちなみに、日本の国勢調査は調査票やインターネットの回答による「調査票方式」が取られているが、行政記録情報などを使用する「レジスター方式」の導入が欧州を中心に増加している。今後、教育情報もレジスター方

式によって脱着なく、より多くの児童・生徒のデータが集まり、情報連結・統計作成が行われていくようになるかもしれない。

◆ 相関と因果関係

学力・学習状況調査では、両調査をクロスして見る集計もされている。

・読書が好きですか×教科の成績(図3)

で相関を見ると、国語との成績との相関が0.276で、弱い相関があるといえる。ここで注意が必要なのは「相関がある」は「因果関係がある」ということではないということ。つまり、読書が好きになれば国語の成績が上がる、あるいは逆に、国語の成績が上がれば読書が好きになるという因果関係は言及できないということ。相関関係を因果関係で解釈した分析は、意図的であればたちの悪いはずだし、無意識であればリテラシーの欠如が疑われる。

◆ 多様化する時代だからこそ

多様化するVUCA^{*}の時代だからこそ、ときどき立ち止まって、冷静な目でデータを俯瞰することが大事なのではないか、そんな思いから、本稿を進めてきた。

センセーショナルな数字が報道では好まれるが、その数字のウラ側に光を当てたり、別の視点の数字と比較したりすることで見えてくる事実もあるという例として参考にしていただければありがたい。

※VUCA=先行きが不透明で将来の予測が困難な状態

図3 令和5年度全国学力・学習状況調査

相関係数 [生徒質問紙-教科] 全国一生徒(国・公・私立)

中学校調査

質問番号	質問事項	国語	数学	英語
(12)	学校に行くのは楽しいと思いますか	0.057	0.088	0.081
(13)	自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか	0.146	0.150	0.141
(14)	友達関係に満足していますか	-0.017	0.007	-0.003
(15)	普通の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか	0.066	0.059	0.065
(23)	新聞を読んでいますか	0.103	0.130	0.149
(24)	読書は好きですか	0.276	0.196	0.181

令和5年度 全国学力・学習状況調査 報告書・調査結果より